

荒れ狂う濁流“大樽川” 400年の時代を経て、新たに総合内水対策へ！

■流域の概要

大樽川は、岐阜県輪之内町大藪地先にその源を
発し、福束輪中の南側を北東から南西に流れ、揖
斐川27.0kmに合流する流域面積18.7Km²、河
川延長8.2Kmの一級河川です。流末から大樽橋
(4.3Km)までを岐阜県が管理し、その上流（準用
河川）を輪之内町が管理しています。



大樽川（平成25年11月撮影）

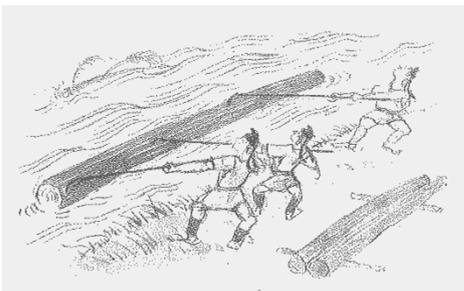
■流域の歴史

大樽川は、長良川の洪水に悩まされた高須輪中
の住民が1619年（元和5）年に勝賀（海津市平
田町）から今尾（海津市平田町）までの区間を新
たに掘って作った人工河川です。

大樽川が完成すると長良川の水の多くが大樽川
に流れるようになり、今度は揖斐川流域の洪水の
危険性が増したため、揖斐川流域の住民が願い出
て、1751年（寛延4年）に長良川との分流点に
食違洗堰を築き、更には薩摩藩が行った宝暦治水
の一環として、1755年（宝暦5年）大樽川洗堰
が築造されました（図-1）。これらの対策に
より被害は緩和されたものの抜本的なものではな
く、やはり毎年のように水害に苦しめられていた
ため、明治政府は、1899年（明治32年）オラ
ンダ人技師のヨハネス・デレーケを招聘し、明治
改修工事によって、洗堰が取り壊され、長良川と
大樽川が完全に締め切られました。（図-2）

■大樽の由来

大樽の「樽」という字は、「樽木（細い材料や
板にする木材のこと）」に関係があり、寸法の規
格により、大樽や小樽などと呼ばれていたよう
です。昔、木曾川や長良川が増水した時、流木とな
った樽木が、この地に流れ着くことが多く、樽木
の引き上げ場所になっていたという説が考えられ
ています。（平成3年編集「大樽川」より）

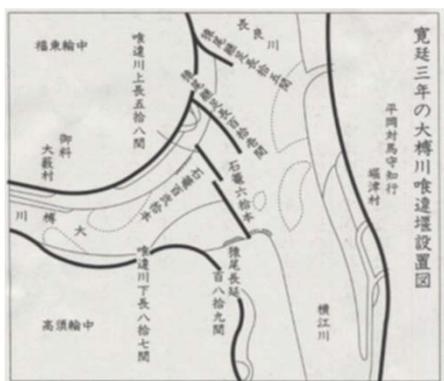


宝暦治水の概要（約250年前）

宝暦治水は、江戸時代の幕命により薩摩藩が行った治水工事です。濃尾平野の治水対策として、木曾川、長良川、揖斐川の分流を目的に行われた工事で、「逆川締切」「大樽川洗堰」「油島締切工事」が挙げられます。

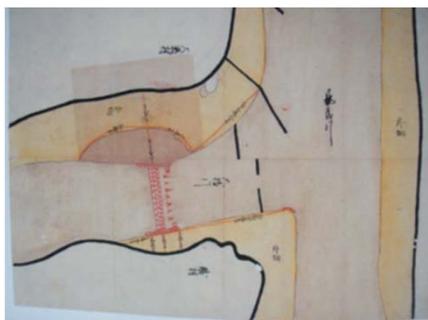
① 大樽川喰違堰

大樽川はもともと長良川の洪水の流れをよくするために、長良川と揖斐川を結んだ人工河川です。高須輪中の人々が洪水被害を防ぐために計画し、自普請によって元和5年（1619年）に完成しました。両川の川底の高低差が八尺（約2.5m）もあったため、洪水毎に長良川の水が大樽川に奔流して、福束・高須の両輪中を氾濫させていました。これを解決するために、寛永3年（1750）に大樽川喰違堰を設置しました。



② 薩摩洗堰

しかし、大樽川喰違堰を設置しても規模が小さく、水の勢いを押さえることができず十分な効果が得られなかったため、宝暦3年（1753）、幕府は大規模な治水工事を薩摩藩にお手伝い普請として命じて、宝暦5年（1755）3月に完成したのが、薩摩洗堰でした。



宝暦五年大樽川大藪村方外畑欠所絵図

③ 大樽川洗堰

しかし、この洗堰完成後、半年とたたない宝暦5年（1755）5月の出水で決壊流出したため、再度調査が行われ、薩摩洗堰より110間（約200m）上流に、全面石築の堰堤が宝暦8年3月に築造されました。石堤は高さ1.2m、堤敷約40m、長さ約180mの洗堰の形式でした。以降、明治32年大樽川の締切堤の完成するまでの約150年間にわたり、長良川・揖斐川の両川の制水の役割を果たし、福束・高須輪中等の水害から守ってきました。

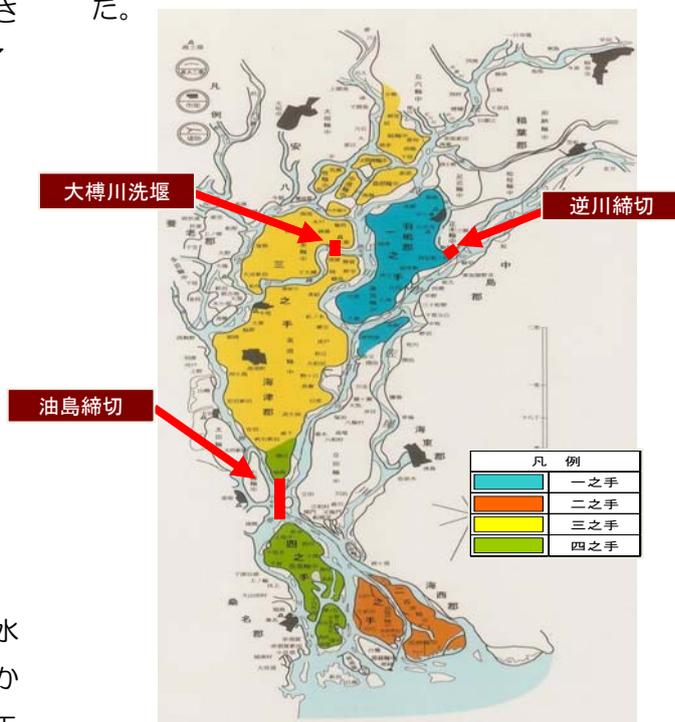


図-1 大樽川洗堰

※洗堰とは、川を横断する石に覆われた堤防のことで、大規模な堤防により完全に遮断することなく、川の水位が一定以上を越えた場合、越水させるための構造の堰を言う。

明治改修の概要（約100年前）

オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケのもと、明治20年～明治45年に行われた三川分流工事

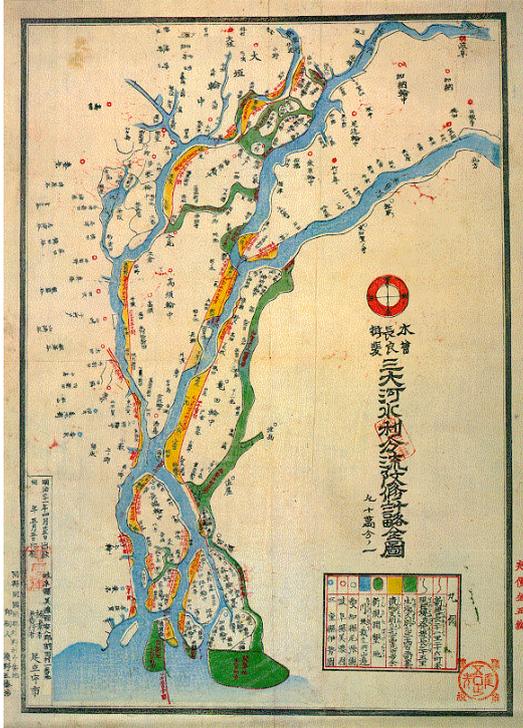


図-2 明治改修計画図



ヨハネス・デ・レーケ



平成10年宝暦治水サミット資料より

明治政府は、河川や港湾の工事を行うため、オランダから10人の技師団を招きました。その一人、ヨハネス・デ・レーケは明治11年から木曾三川流域を山から海までじっくりと調べて回り、その結果をもとに改修計画を作成しました。明治20年から25年間をかけて、三川分流工事が行われ、木曾三川はほぼ現在の姿になりました。その1つの改修計画が、「大榑川の締切り工事」でした。現在、大榑川は、廃川となり、川底は払い下げられ民有地となって開墾され、当時の大榑川洗堰は田面から没して、その面影を見ることは出来ませんが、今でも、三、四尺（約1m余り）掘れば、往年の石積を見ることが出来ます。



三川分流碑（平成25年10月撮影）
（木曾川右岸24.4Kp 海津市成戸地先）

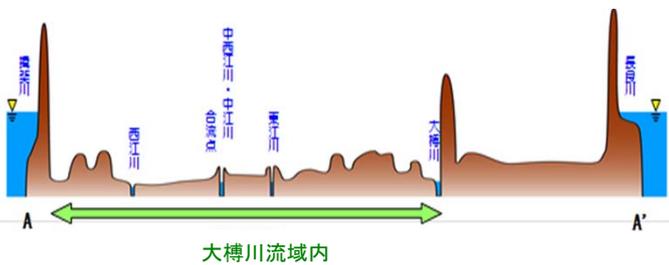
碑には、宝暦治水を経て、三川分流を目的とする明治改修工事に着手せざるを得なかった経緯などが記されています。ここに、「六年、(明治)官、蘭人を聘して地勢を測勘し工程を企画す」と書かれています。「蘭人」というのは、デレーケのことを示していると想像できます。



薩摩洗堰遺跡（平成25年11月撮影）
長良川右岸30.0Kp 輪之内町大藪地先

【近年の治水対策】

大樽川流域では、その地形的特徴から内水被害が度々発生したため、その対策として、当該流域の流末に湛水防除を目的とした福東排水機場^{ふくつか}を設置し、大正13年にポンプ4台を設置以来、昭和39年までに計9台のポンプ増設を行いました。その後、老朽化により著しく機能が低下したため、ポンプの取り替えを目的とした湛水防除事業が昭和63年に事業着手し、平成7年から運転を開始しました。この事により、全体内水計画26m³/sのうち、17.88m³/sの排水が可能となりました。



福東排水機場 (平成25年10月撮影)
揖斐川左岸27.0K p+130m 輪之内町柿内地先

その他の治水対策として、岐阜県による中西江川の河道改修や、県管理区間の上流の準用河川の区間においては、輪之内町および高須輪中土地改良区による大樽川の河道改修が実施されました。また、岐阜県による土地開発事業の調整規則に基づく指導により、1.0ha以上の開発に対する流出抑制対策として、これまで8箇所の調整池が設置されています。



昭和51年の浸水状況

【大樽川総合内水対策計画策定へ】

これまでの様々な治水対策により、流域の治水安全度は向上しましたが、流域開発の増大や盛土による遊水機能の低下、降雨特性の変化などにより、浸水被害が、今なお発生しています。

このような状況にある当地域の浸水被害軽減のため、関係する行政機関や地域住民が一体となって、総合的な雨水排水対策を推進するための、「大樽川総合内水対策計画」を、平成23年11月に策定しました。今後は、当計画に基づき、平成24年度から5カ年計画で、この地域の床上浸水を概ね解消することを目標とし、浸水被害に対して緊急的かつ効果的な対策を講じていく予定です。

★詳細は、以下のアドレスよりご確認ください。

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/naisuitaisaku/oogure/oogure.html>



大樽川堤防の桜並木 (輪之内町提供)